

明日を生きたい

ヒマラヤのふもとから

3年前、西南に約400キロ離れたインドの紡績工場に出稼ぎに行った。工場はネパール人の子どもばかり。朝6時から夜10時まで働いたが、最初の3カ月は無給だった。4カ月目から一月500インドルピー(1インドルピーは約3円)の給料をもらった。稼いだ金は、父が持つて帰った。

ある日突然、右手がしびれ、治らなくなった。とうとう解雇さ

ネパール南部・ジャナクプール市近くの村。土壁と茅葺き屋根の家の軒下で、ジバン・ラヨ君(16)に出会った。「右手が動かない。左も、動かなくなってきた」。表情をほとんど変えない。とても疲れているようだ。

父は日雇い仕事で、母と5人の弟妹がいる。幼い兄弟は学校に行かず、草刈りやマキ拾いを手伝っている。苦しい生活だ。

出稼ぎ労働 心と体に傷



れ、7カ月前に戻ってきた。女祈とう師にジバン君を見てもらうため、母はヤギを売ってお金をねん出した。「魔女ののろいだ。ヤギをささげなさい」。その通りにやってみたのに、治らない。祈とう師は次に、「病院に行きなさい」と言った。しかし、

売るものももう、何もなかった。ジバン君は毎日何もせず、ブラブラしている。「いい病院は遠い。お金もかかる。治療させてやりたいのです」。そばで、母は嘆いた。

近くに16歳の少女、シャムニ・カパンギさんがいた。

険しい道を通り、重い荷物を運ぶ家族連れ。小さな子供も貴重な労働力
＝ネパールの農村で



「一日中、泣くか笑っている」。向かいのおばさんが、小さな声で教えてくれた。

6年前、プロローカーに誘われてインドのデリーに双子の姉と一緒に出かけた。仕事は家事手伝いだった。1年後、姉が異変に気付く。知らせを受けた家族が2人を連れ帰った。

母はシャムニさんを祈とう師に見せた。効果はない。シャムニさんがなぜそうなったのか、母には分からない。シャムニさんは、若い男の姿を見ると逃げ出すという。よほどひどい仕打ちを受けたのだろう。

ネパールでは、多くの子どもがインドに出稼ぎに出る。ヒザはいらず、国境の出入りは自由だ。安い労働力を求め、人集めのプロローカーもやっている。親は危険を感じながら、口減らしもあって子どもを出稼ぎに出す。

その多くは、傷ついて帰ってくる。しかし、故郷には、心と体のケアができる施設がほとんどない。シャムニさんが元通りになる日は、いつくるのか。

＝つづく

生活費求め、インドへ

文・連見 新也
写真・懸尾 公治

● 病院建設にご協力を 「目に見える援助」を実施するため、今年のキャンペーンは従来の国連機関などへの寄金に加え、ネパール現地を進められている子ども病院建設計画にも協力します。

救援金は、下記へ郵便振替か現金書留で送金いただくか、直接ご持参ください。〒530-51 大阪市北区梅田3の4の5、毎日新聞大阪社会事業団「海外救援金」係(郵便振替・00970-9-12891)